

懐かしい未来新聞

発行：甲賀市
地域共生社会推進課
連絡先 内線1350
0748-69-2155

本号の内容
・権利擁護セミナー演劇で伝える
・歳末炊き出し
・重層物語スイートメモリーズ7

市民向け権利擁護セミナー・演劇で伝える 幹太郎一家から学ぶもの

令和7年12月13日、宇川会館にてNPO法人ばんじー主催（甲賀市、湖南市、ならびに甲賀市社会福祉協議会、湖南市社会福祉協議会の共催）の「市民向け権利擁護セミナー」が約50名の参加のもと開催されました。演劇の力を借りながら、高齢者の権利擁護をみんなで学ぶ機会となりました。



▲認知症の幹太郎が巻き起こす騒動は、ご近所を巻き込み繰り広げられる。「虐待だ」と割って入るお向かいさんと見て見ぬふりのお隣さんの場面

演劇のあらすじ(冒頭)

新たな3人暮らしは、望まない形で始まった。第一志望の大学に合格し、一人暮らしを始めた娘と入れ替わるように、夫の父親(幹太郎)がやってきたのだ。嫁の茜は子育てがひと段落したら、長年の夢であった書道教室を自宅で開催することを心待ちにしていた。その楽しみがあったおかげで、勤め先の上司の小言や、夫の無関心、娘の身勝手にも耐えることができたのだ。それなのに、いよいよという大事な時期に幹太郎の介護が始まったのである。

本企画は、市民向けに権利擁護を考える機運を高めるために、「誰もが権利侵害を受けることなく安心して暮らせる地域づくり」を目指し毎年行われるものです。今回のセミナーで目玉となったのは、高齢者の権利擁護をテーマとした演劇は去年に引き続き2回目となります。身近に起こりそうな家族の会話、近所とのやり取りを赤裸々に演じる役者は、甲賀市、湖南市の市職員、社協職員たちで息の合った演技に圧倒されます。上演後の講義ではNPO法人ばんじーの桐高所長より、演劇の事例を通して地域でできる虐待の早期発見や見守りの重要性について解説がありました。来場者からは、「とてもわかりやすく、自分の親を思い出した」「虐待、権利擁護という難しいテーマだったが、演劇と講義がセットだったので、理解しやすく勉強になった」「登場人物のやり取りを通して本人の思いや周囲の関わり方について考えることができた」と感想を述べられ、見ているものが自分事として考えられる機会になったようです。関西圏域の大学の先生方も駆け付けてくださり、画期的な手法を称賛くださいました。今後関係機関が連携し、権利擁護の推進に向けて取り組んでまいります。

いつのまにかから プラットフォーラム

2025年 12月30日 年末の炊き出し 年の暮れの日暮れに At dusk at the end of the year 2025



▲多くの人でにぎわう室内の様子



▲子どもたちが企画 お楽しみコーナー



▲具だくさん豚汁とおむすび

今回で4回目となった「年の暮れの夕暮れに」(歳末の炊き出し)を、令和7年12月30日、さわらび作業所の協力を得てスポットライフルいろは(水口町新城)にて、開催することができました。今年、20人以上の来場者があり、「生活に困窮したり悩みを抱えている人」「障がいのある人」「外国にルーツがある人」「ひとり親家庭に関連する人」といった多様な生きづらさを抱えた方が来られました。実行委員会形式での呼びかけで集まったスタッフメンバー50名の中には、当課が夏に主催した若者講座に参加した人や、児童養護施設で生活する子どもたち、障がいを持つ人、地域の子どもたちが構成され、多様な主体が参加する炊き出しとなりました。来場者の中には「今年が良い



▲当日に、参加者に任意で答えてもらったアンケート調査

ことなかったかと思っていたけど、ここに来れたことが良かった」と話される言葉に、スタッフ一同、温かい気持ちになりました。今回も多くの企業や関係者の差し入れやご寄付、励ましをいただいで開催できたことにこの場をお借りして感謝申し上げます。

※懐かしい未来とは、これまで古い価値観として捨ててきたものの中に、実はこれからの暮らしに必要な大切なものがあつたのではないかと気づきから使われはじめた言葉です。

重層物語

スイート・メモリーズ 7

松田プランを実行した目を境にして、二十三日に聞こえてきた奇妙な声はびたりと止んだ。まるで、あの訳の分からぬプランが成功したことを示唆するように。ただ、

「一人で幸せになろうなんて、それは無理やからね」
帰りの透子さんの言葉は薄暗く謎めいたままだった。それこそ誰に向けられたメッセージなのかも判然としない。私に対する警鐘めいた響きも含まれていたし、「……共同体とは、なんぞや」という松田さんらの抱えていた問題を解くヒントのようにも聞こえる。もしくは透子さん自身のささやかな人生に向けられた悔恨のつぶやきだったのか。とにかく、奇妙な声が止んだ後も、もやもやとした感覚が二十三日になるとひとりごとで甦ってくる。

年が明けてほどなく、透子さんは体調を崩して入院することになった。風邪をきっかけに肺炎をこじらせたのだ。一時的に呼吸不全に陥ったこともあって入院は長引き、それに伴い足腰も気力も徐々に弱まっていた。

結局、透子さんが元気な姿で隣家に帰ってこなくてはいけなかった。奇妙な夜を数時間ともに過ごしたにせよ、深い間柄ではない隣人の死は、まるで異国の地で起こった飛行機事故のように感じられた。

「遅かれ早かれ、隣家からの声は止んだといつてか……」と、私は声に出さずに言った。「ひとつも器用に受けへんかった人間が、ここにおつたこと、忘れんといてね」

ふと、あの夜の言葉思い出した。まるで脳内に埋め込まれていたアラームが「今だ」とばかりに作動したかのように。確かにそう、透子さんの死は遠い国のニュースではなく隣人の話だ。

透子さんには二度と会えない。あの夜に隣家で体験した幾つかの不可解な出来事について、質問することのできる唯一の相手を、私は永遠に失ってしまったことになる。

「透子さんに聞かなくては」と仕事の合間に思ったことは何度かあったが、私は日々のあれこれを優先させて機会を逃してきた。おおろかではなく無責任という意味合いで、どうしようもなく呑気な人間に思えてならなかった。

休日の午前十時。団地内にクラクションが鳴り響き、半年ぶりに帰ってきた無言の家主を乗せて、静かに霊柩車は出発した。

手を合わせ、透子さんを見送る私は、気味の悪い喪失感に襲われていた。「これでよかったのでしょうか」とあいまいな問いを横にいる松田さんに投げかけた。

「どうやらなあ」と松田さんもあいまいに返事をした。「松田さんの求めている答えは見つかったのですか」と、少し具体的に聞いた。

「そやなあ、すつきの解決とはいかへんけどなあ。後悔はしてへん」
松田さんは何かしらの解答を得て、しかも後悔していない。一方の私は、モヤモヤをしょい込んで、透子さんに対する後ろめたさのようなものまで感じている。

「では、共同体とは何だったのでしょうか」
ひとり寂然としない私は、意地悪くもストレートに問った。

「……不思議やなあ、亡くなったのは透子さん一人やのになあ」
松田さんは前方の遠いところを見つめながら言った。その横顔は、話をべらべらかしたようには見えなかった。前方に目を向けると、霊柩車が曲がり角を左に折れて、ちょうどその姿を消

した。

「透子さんが」なくなったこと以上の喪失感……正直、少し怖いんです」
上手く言葉で表現することができなかったが、今の心境をそのまま口にした。「そややなあ。わしも今もそんな気持ちや」
「よりの大きな喪失感……」
「わしらは知らんまに失ったんや」

霊柩車の後を追うように、親族らがバタバタと車に乗り込んで行った。柩家の玄関先には、私と松田さんの二人が取り残されて、静まり返った路地に立ち尽くしていた。少し先にある電柱の陰から飛び出し坊やが無表情な笑みを浮かべている。

「寂しなるなあ……」
松田さんはそう言つて、農協の帽子を深くかぶった。

「北島くんよ、なんぼ貯金があつても、経歴がご立派でもなあ、ひとりではなれんちゅうこや、ひとりでは……」
松田さんは涙を手で拭つて、かぶっていた帽子をとり、深く澄んだ昼前の青空を見上げた。

そして、顔を天に向けたまましばらく目を閉じていた。やがて、決意したかのように目をゆくりと開き、「よしっ」と小さく言った。そして、私に優しく微笑みかけ、肩をポンと叩いてその場を去って行った。

「松田さん、あの、また釣りにでも行きましょう、大村さんも誘つて」
私は松田さんの背中に向けて、とつさに言った。

松田さんは後ろを振り返ることなく、軽く右手をあげた。

松田プランを取り巻く一連の騒動は、個人的なお悩み相談の域を超えて、広く普遍性を帯びながら私の心を揺さぶった。透子さん、松田さん、大村さんの甘い記憶が私の身体を通り貫ける際に、チクリと何かで刺されたような痛みがある。それは、いつまでも抜けない棘のような疼きだった。

（失われた共同体への追憶 こんな風にまとめることができるのかもしれない。）

透子さんを玄関先で見送つた一週間後、郵便ポストには、『男三匹、世界を釣る2026』と書かれた用紙が投函されていた。プランの詳細は後でじっくりと確認することにした。

同日の二十三日。いつものように書斎の椅子に腰かけて本のページをめくる。窓を少し開けると冷たい外気といつしよに金木犀の香りが部屋に入ってきた。

（金木犀？ 時季外れじゃないか）
不思議に思つて透子さんがいなくなった隣家を見ると、うつすらと灯りがともっている。はて、誰もいないはずだが……。

よく見ると隣家の小窓には人影があり、こちらを見つめているようだ。月明りがその人影を照らす。するとそこに眉毛の太い男が立っていた。

（解体されたものは、つくりなおせばいい）
そう言われた気がした。
私は（ただし一人ではできない）と、心の中で付け加えた。

バックナンバーはこちらから↓

